

平成 28 年度みんぱく若手研究者奨励セミナー
企画展における映像制作プロセスに立ち現われる諸問題と展示映像の可能性

吉本裕子
横浜市立大学大学院都市社会文化研究科客員研究員

発表者は、北海道 X 地域博物館で来春開催予定の企画展に、外部研究者としてかわり、企画立案から映像制作まで一連の展示作業に携わっている。本発表では、映像撮影から編集に至るまでの展示映像の制作プロセスを明らかにし、そこに立ち現われる諸問題を検証しつつ、展示映像の可能性を検討する。

企画展では、ひとりのアイヌの古老のライフストーリーを題材に、「昭和のアイヌのくらし」を展示する¹。展示のねらいの一つは、古老が過去の「記憶」をどのように想起し、その記憶を「今ここ」にどのように繋げているのか、そのプロセスを描き出すことである。その点において、映像はモノ資料を補完する副次的な展示物ではなく、古老の心情を表象するための重要な展示資料として位置づけられる。

本展示映像は、発表者と映像作家 A さんがそれぞれ撮影した素材をもとに、発表者が編集し、制作したものである。同じ古老を被写体としているが、撮影者二人の撮影方法は異なっており、素材には、聞き手の存在が不可視化されたインタビュー形式のものと、聞き手/語り手の関係性が映り込むものが混在していた。聞き手が映像に映り込むことに拘ったのは、展示表象における権力性の問題を意識していたからに他ならない。しかし編集段階では、展示ストーリーやモノ資料との連続性、展示制作の協働性、公的博物館の立場性、来館者が視聴できる時間的限界などを考慮しつつ、素材を取捨選択することになった。

多様な人やモノの関わりのなかで制作された展示映像は、展示空間のなかでどのような可能性を持つだろうか。博物館展示の中でモノ資料は展示を構成する中核とみなされてきたといえる。しかし、博物館の外の世界においては、モノは人間との関わりのなかに存在しているが、その文脈から一旦切り離してしまうと、展示空間にモノを配置しただけでは意味をなさなくなる。つまりモノはそれ自体では「物語らないモノ」なのである。企画展で扱うライフストーリーが個別の小さな物語である以上、展示物として選定されたモノに、キャプションや映像で古老に関わる情報を組み込まない限り、来館者はモノから私的な記号性を読み取ることはできないだろう。その一方で、動的な映像は、「物語らないモノ」の情報を補うだけにとどまらなると考える。ライフストーリー展示では人を題材にしている点でモノより映像が主導的になることがある。映像には、古老の表情、仕草、声のトーンなど古老が語る言葉以上の情報や関係性が含まれ、さらには古老の記憶の中にある複数の時間性を瞬時に視覚化できるなど映像特有の利点が認められる。

発表では、はじめに企画展の趣旨と展示構成を説明し、次に展示映像「<今ここ>につながるエカシの記憶（約 10 分）」の上映を行う。そのうえで、映像制作プロセスに立ち現われる様々な葛藤や問題を検証しつつ、モノやキャプションでは表現しきれない展示映像の可能性について検討する。

¹企画展タイトル：「エカシの記憶を辿って～昭和のアイヌの暮らし～」(仮題)

会期・場所：2017年春季、北海道X地域博物館

展示趣旨：本展示では、●●川流域のコタンで生まれ育ったアイヌの古老のライフストーリーを題材とし、昭和の●●川流域における「アイヌの暮らし」を紹介する。特に、これまで取り上げられることが少なかった▲▲などの地域に着目する。今を生きる古老自らが当時の暮らしについて語る映像を連続上映し、それに関連する古写真を含めたモノ資料を展示し、常設展では語られない「伝統」と「現代」の狭間にある「変容するアイヌの暮らし」を可視化する。近代化の波が押し寄せていた昭和期は、同化政策の影響を多分に受けつつも、アイヌ文化は変容しながら人々の生活の中に生き続ける時代であったことを提示し、当時の暮らしが今日のアイヌ文化継承へ繋がっていることを描き出す。